

卷頭言

戦後 80 年に想う一平和であること

名古屋産業科学研究所 研究部 上席研究員 山根隆

日本の人々は戦争の話をしているのだろうか。今ウクライナや中近東で戦闘が続いている。そのニュースを見ると私は暗くやるせない気持ちになる。私は今ニュースになっている日本から遠く離れた地域で起こっている戦争については、人と「戦争はいけない。早く終わるといいね。いや終わらせなければならないね」などと話はしている。しかし日本が関与した戦争については、テレビのドラマなど {たとえば「坂の上の雲」} を見て、やはり戦争は良くない、と思うが人と話をしたことはほとんどない。なんといってもテーマが重く話しづらい。話さなくても関心がないわけではない。そうは言っても戦争の恐ろしさを頭で理解しているだけで実際に体験しているわけではないこともあり、人と話すのをためらわせる。私たちは 1945 年の敗戦以来、平和は大事である、貴重である、ということを身にしみて感じて来ているのに、この平和を維持するのに何が必要か、どうすればよいのか、ということはあまり真剣に考えていないのかもしれない。

1974 年に佐藤栄作氏がノーベル平和賞を受賞した。佐藤栄作元総理大臣は、1974 年 NPT= 核拡散防止条約に署名し平和に貢献したことや、1972 年の沖縄の施政権返還時に米軍の核搭載船の日本寄港を認めなかつた事が評価されたと言われているが、若い人たちに理解できるかどうか。1964 年 8 月から始まったアメリカ、南ベトナムと北ベトナムとの戦争は、1975 年 4 月末まで継続していたことを考えると、ベトナム戦争の終結と平和の実現にむけ日本も貢献していくことへの期待もあったのではないかと思っている。ベトナム戦争は私の学生時代に重なっている。ベトナムの一般市民が大きな被害を受けていたこともあり、アメリカのみならず日本でも反戦の輪がひろがった。ただ学生の活動は大学紛争に流れて行ってしまったが。カメラマン沢田教一氏のベトナム戦争を撮影した写真は、ピューリッツァー賞を受賞したし、彼の行動が私たちに大きな影響を与えたことは言っておかねばならない。

2024 年のノーベル平和賞は日本原水爆被害者団体協議会が受賞した。「ヒバクシャ」として知られる広島と長崎の原子力爆弾の生存者たちによる草の根運動は、核兵器のない世界の実現に尽力し、核兵器が二度と使われてはならないことを、ヒバクシャ自身の言葉で示してきたことが評価された。ヒバクシャは歴史の証人として、核兵器が引き起こす大きな被害とともに、理解が及ばない人体への長期にわたる影響を我々に理解させ、そのような事態を引き起こさないよう訴え続けてきている。幸いなことに戦後 80 年の間、戦争で核兵器は使用されてこなかったが、これは日本原水爆被害者団体協議会やその他の被爆者のグループの「核兵器は使用してはならない、廃止されなければならない」という訴えが、核兵器使用のタブーを世界に広めてきた大きな要因といえよう。

個人的な話になるが、私の父は広島県呉市の出身で、母は広島市の出身である。広島は戦争末期は陸軍の重要拠点となっていた。広島湾をはさんだ呉市は、呉海軍鎮守府と兵器工場である呉海軍工廠を擁する海軍の拠点であった。呉の軍港は 1945 年 7 月に複数回に渡って空

襲をうけ、呉の市街地も同様に空襲を受け、どちらも大きな被害が出ている。1945年当時、母は祖母と母の妹と弟とで広島市内に住んでいた。8月6日の朝は、母の弟が中学生の勤労動員で出でていくのを見送り家の中にいたところ、突然家が潰れ、しばらくしてあたり一面火事になった。母の弟は原子爆弾により亡くなり、家も燃えてしまった。しばらくして父が探しに来て会うことができた。これが戦争について母から聞いたことである。父も従軍して満州に赴き、原子爆弾投下直後に広島に行ってその惨状を見ているのだが、戦争について私に話してくれたことはほとんどなかった。

私は戦後の広島の生まれではあるが、そういう意味で、核兵器による施設や人的な被害の惨状をよく知っているわけではない。私の成長とともに、広島が美しく変わっていくのを傍観していたにすぎない。両親から、戦争の悲惨さを言葉で伝えてもらえなかつたことは、両親の大切な思いを伝えてもらえなかつたような気がして、積極的に聞こうとしなかつたことを悔いている。

したがって、日本原水爆被害者団体協議会が「長年にわたって国や自治体に援護施策の拡充を求める一方、国連軍縮特別総会や核不拡散条約(NPT)再検討会議といった国際会議に代表者を派遣し、また被爆体験の証言や原爆展の開催、署名活動などを通じ、世界に向けて核兵器廃絶や核実験禁止を訴え続けてきた」、そしてなんといってもその活動の記録が残されていることは大切である。

人は忘れてはいけないことでも忘れてしまうものである。個人や組織の活動の記録を残すことは大切である。記録があれば、それをもとに私たちは完全ではないにしても理解することができ、後世の人々に伝えていくことができる。大学の教員は研究や実験の記録をきちんと残し伝えていくことの大切さは身に染みている。研究や実験の記録は、記録として残されなければ、それは時とともに忘れ去られてしまう。

平和への活動の記録というものは、あまり身近には感じられないものようである。それは、日本は今までと同様これからも変わらず平和だと思い込んでいるためかもしれない。このような状況は平和日本に甘えているようで少し恥ずかしい気もしている。「ヒバクシャ」の長年にわたる記憶を残し継承していくという活動により、核兵器は使用されてはならないし、使用させてはいけない、という思いが世界に広められてきた。しかし最近の世界情勢を見ると、核兵器使用のハードルが下がってきているのではないかと懸念されている。戦後80年、日本は戦争をせず平和を享受してきた。2024年のノーベル平和賞により、平和について知り考える、そして平和の大切さを周りに伝えていく、という地道な活動を行っていくことが必要であると自覚させられた次第である。